



鳥川上流部

1981年8月30日
I

前夜は旧13号線にかかる橋の上にテントを張って、交流を深めあった。今日は6パーティにわかれ、それぞれ別々の沢に入る。我々のパーティは鳥川上流部だ。昨日廻行した下流部が全くの平凡であっただけに、上流部もそうではないかという不安がつきまとう。6時出発。朝の水の冷たさが心地よい。不安は適中した。小さなナメが出てくるだけで、滝はその姿も見せない。いつ引き返そうかとタイミングをはかりながらも、もう少し行けば滝があるかもしれないと、希望的観測だけで1歩1歩進む。左右に小沢をわけて水量もぐっと減ってきた。水のかれるのも間近だから、そこまで行こうと、自分自身をはげまして進む。やがて5mの滝。「あった。」と大喜び。さてどう登るか考えたが、捲くより仕方なさそうだ。左岸の不安定な草つきを登って捲く。この上にも4mの滝がある。こっちは直登だ。2つあって大取覆。このすぐ上で水もかれる。さあ引き返そう。

(記)

旧13号橋(6:00)——終了(7:50)

**本流
滑谷沢左俣(下降)**

1981年8月30日
I

鳥川上流部
(作図)

天気晴。6:40 廻行開始。あまりの平凡さに退屈した頃、30mほどの長さのナメが3本続く。沢床のほとんどが滑状になっていて、滑谷沢という名前もなるほどという感じである。7:20, ようやく滝をみる。F8 2.5m。この辺からナメと小滝が交互に現われ、8:17 この沢最大の滝 F4 10mに着く。幅・水量とも充分で、高さの割に迫力を感じさせた。右の草つきを捲いて小休止。右俣へ入るパーティと別れる。ここを過ぎたあたりから沢の様相は次第に平凡になってきた。そして私のペースも落ちた。前日の廻行で爪をはがし、時々全身に激痛が走る。10時頃、F3 5mに着く。釣人の話では熊滝とよばれているそうである。私自身は痛みで意識モウロウ。自己陶酔の世界